

路地の小判

野村胡堂

—

「親分、笑っちゃいけませんよ」

「何だ、八」

「親分もあつしも同じ人間でしょう」

ガラツ八の八五郎はまた変なことを言い出しました。

「その通りだ、眼が二つ、口が一つ、なるほど、こいつは不思議だ。今まで気がつかなかったが、手前の言う通りお互にあんまり変っちゃいないね、八」

銭形平次もこの調子です。

「まぜっ返しちやいけません。——ね、親分、その同じ人間のあつしが、どう修業しても、親分のような良い御用聞になれないのは、どう言うわけでしょう」

ガラツ八はつくづくそう言うのでした。歳は幾つも違わないはずですが、人間の貫禄かんろくはあまりに違い過ぎます。

「そう言うなよ、八、手前てまえの方が余っほど人間が出来ているのかも解らないじゃないか、神様や仏様から見れば」

「神様や仏様は勿体もってえねえ、せめて八丁堀の旦那衆が見て、良い御用聞だとなるには、何か秘伝ひでんのようなものがありやしませんか」

「口伝くでんも極意もないのがこの道さ」

「それとも、摩利支天まりしてん様へ願をかけるとか何とか」

「角力すもう取りじゃあるまいし」

「でも、何かありやしませんか、親分、あつしはどうせ大した人

間じゃねえが、お上の御用を聞いてる以上は、一生にたった一度でいいから、八五郎は天晴れだ——と言われてみてえ、それには何か、心掛けのようなものかありやしませんか」

ガラッ八の八五郎は、日頃になく思い込んだ様子で言うのでした。擬物結城の狭い単衣、長んがい顔を引締めて、思いこんだ様子が、日頃が日頃だけに、一脈の物の哀れを感じさせるのでした。

「八、たいそう改まったが、御用聞には型も極意もねえ。『馴れ』だけに頼って行くのは下根、理詰めにも物を考えて犯人を挙げるのは中品、『勘』で行って、百に一つも間違わないのが上々だ。だから手前だって、下手に『馴れ』や『屁理屈』にはまり込まなきゃ、思いの外の手柄をするかも知れねえ。こんど何かあったら、存分にその鼻を働かして、嗅ぎ出して見るがよい」

こうしんみり言う平次、それほどの名人になって、快刀乱麻を断つような明智の持主でも、最後はやはり人間の『直覚』に頼らなければならぬことを知っているのです。

「勘なら、姐御なんざ大したものだけ、あっしの腹の中から、財布の中まで見透しだ」

「あれ、八五郎さん」

お静はたまりかねて、障子越しに声を掛けました。

「そこにいなすったんか、——こいつはいけねえ」

「朝の御飯の催促なんでしょう」

「ヘッヘッ、凶星で、ここに泊ると、お茶と香の物がたまらねえ」

「お世辞を言っちゃいや、八五郎さん」

まだ娘気分の抜け切らぬお静は、こう言って、朝の支度に取り掛りました。

丁度その時でした。

「大変！ 親分さん、すぐお願い申します」
飛込んで来たのは、横山町の鳶頭かしらです。

「どうなすった、鳶頭」

「大黒屋の番頭正次郎さんが殺されて、今日細川様へ納める五千両の大金が、煙のように消えてしまいましたぜ」

「なるほど、そいつは大変だ」

平次は箸はしを投り出して立上がりました。横山町の大黒屋市兵衛というのは、油の小売から仕上げて、今では廻船問屋から、大名方の御金御用達まで承うけたまわっている大町人だったのです。

それから半刻はんときの後、銭形平次と八五郎は、横山町の現場に駆け付けておりました。

「寄っちゃんならねえ、手なんか付けると掛り合いだぞ」

番太の老爺おやじと町役人が声をからして群むらがる弥次馬を追っ払っているのも無理はありません。大黒屋の裏口で殺されたという、番頭正次郎の死体は取り入れましたが、不思議なことに死体があつたという裏口から、大川へ通う路地には、葉代しおりがわりに撒まいたように、真新しい小判が、幾十枚となく落散っているのです。

弥次馬の眼が、その小判に光ったのも、番太が声をからしたのもそのため、死体はともかく、路地の小判までも、検屍の役人が来るまで、手をつけてはならなかったのです。

「銭形の親分さん、とんだ御苦勞様で」

主人の市兵衛は、さすがに落着いてはおりますが、今日に迫る五千両を、どう工面して細川様へ納めたものか、その心配に打ち

ひしがれておりました。

後ろから顔を出したのは、老番頭の嘉助と手代の福三郎、これは遠縁に当る男で、いずれは、大黒屋の姪めいで、奉公人とも娘分ともなく養われている、お徳と嫁めあわ合せて、暖簾のれんを分けるだろうと言われている男でした。

「とんだことでしたね、——これほどの騒ぎを朝まで誰も知らなかったのですね」

「誰も気がつきません」

と主人市兵衛、六十近いが少し肥った、精力的な感じの男です。「五千両の金が用意してあることは、誰と誰が知っていました」
「店中で知らないものはありません。御領地の熊本から船で送られた、肥ひごま後米の代金でございますから」

そう言ううちにも、市兵衛の心痛は目に見えて深まる様子です。



「失礼ですが、それを今日中に納めなさる当^{あて}がありますか」
平次の問いは露骨で無遠慮でした。

「なんとかしなければ、私は頸^{くび}でも縊^{くく}らなければなりません」
五千両の現金は大黒屋にとっても大金でしょう。主人の後ろに中腰になっている大番頭の嘉助が、いても立ってもいられないほど気を揉^もんでいる様子を見ると、この工面は市兵衛が軽く言うほどの些細なことではないでしょう。

平次は雇人^{やといにん}達をひとわたり見廻すと、若い手代の福三郎に案内されて、六畳の仏間に通りました。

顔に掛けた中^{きれ}を取ると、荒縄で喉笛を絞め上げられた、番頭正次郎の顔は、二た眼とは見られない凄^{すさ}まじいものです。

「お前さんは？」

「あの、徳と申します」

丸ぼちやの快活そうな娘は、大して臆^{おく}れた色もなく、死体の番をしていたのでした。

「男達が寄りつかないのに、親切なことだね、——変死人は気味の好いものではないが」

平次はこの親切で明るい娘を勇気づけるように、こんな事を言っております。

「でも、正次郎さんには、お世話になりましたし、男の方は外に用事もあることですから」

ともすれば愛嬌^{あいじょう}八重歯が漏れて、頬へ鬢^{えくぼ}の寄るのを、場所柄必死と噛み殺していると言った肌合いの娘です。年は少し取って、厄^{やく}——どうかしたら、二十歳を越しているのかもわかりません。

「八、見るがいい」

平次は死体の頸から切り離して、そのまま肩のあたりに掛けてある荒縄を指しました。

「船具の縄だね、親分」

下手人の当りもこんなところからつくでしょう。ガラッ八は尖鋭なカンを働かせるつもりで、頻りに鼻をヒョコつかせておりません。

「喉の絞めた痕を見るがいい」

「――」

八五郎は唸りました。平次が指摘した死体の喉には、荒縄とは似もつかぬ、細くて深い溝が一と筋、歴々と走っているではありませんか。

「あれはカンじゃない、物の理屈だ。番頭さんを絞め殺したのは、真田紐のような、丈夫で細いものだ。下手人はその紐を捨てて行くくと、足がつくと思つたが、何で殺したか判らないと、後が面倒で、細い真田紐を死骸の頸から解いて、その後へ、その辺に落ちていた荒縄を巻きつけた」

「――」

ガラッ八は一句もありません。こうなると、下根のカンの頼りなさが、はっきり呑込めます。

「この下手人は容易ならぬ人間だよ、落着いて、横着で、考え深くて――」

平次は明日の大取組を前に、相手の力量を考える力士のように、思わず深々と腕を組みました。

「親分」

心配そうにその顔を覗く八五郎。

「少し外へ出て見よう」

平次は八五郎を促して、外へ出て行きました。

二

路地の死体のあったあたりに落ちていた小判は、丁寧に勘定すると七十八枚、それから横山町の大通りから両国の方へも、バラバラと二十二三枚こぼれておりましたが、朝のうちに往来の人に拾われたのも何枚かあるでしょうから、正しい数は判りません。

小判の葉を辿って行くと大川端で、ここには幾艘となく船が舫っております。

「八、昨夜から暁方へかけて、出て行った船がなかったか、訊いてくれ」

八五郎は飛んで行きました。トボケタ顔と、暢気な調子でカモフラージュして、この大事な問いを八方へ持掛けましたが、結局、「誰も気がつかなかったそうですよ、船頭は舫っている時でも気が張っているから、艚や櫂の音を聞き逃すはずはないと言いますよ」

「フーム」

水際に立って、折から引汐の川底ばかり睨んでいた平次も、諦めて立ち上がります。いつぞや水の中に千両箱を三つ隠した曲者のことを想い出したのでしょうか、しかし、大川では人目が多い上、この汐具合では、千両箱は愚か、香箱も隠せそうはありません。

二人はがっかりして引揚げました。主人の市兵衛は五千両の工面でしょう、心痛と懊惱の看板のような顔をして出かけ、老番頭

の嘉助は眼鏡を掛けて、算盤そろばんと首くびつ引きのまま、その側に手代の福三郎を始め、丁稚小僧ていぢは、立ったり坐ったり、唯そわそわとしております。

平次は廊下続きに土蔵の方へ行くと、後から冢内顔の手代が二人つ跟ついて来ましたが、それをみんな追おい返して、まだ仏様の世話をしているお徳を呼出しました。

「誰が土蔵破りか解らないから、うっかり案内を頼めないよ、お前さんなら大丈夫だろう」

「——」

お徳は生真面目にうなずいて、廊下伝いに土蔵へ案内しました。

二た戸前の土蔵ですが、五千両持出された方は、廊下続きの内蔵で、廊下の雨戸は外から破られ、主人の部屋から持出した鍵かぎで、二重の締りをやすやすと開け、中から明日の用意に積んであった千両箱を五つ、物の見事に持出してしまったのです。

「ところでお徳さん、——この店中で、主人から一番信用されているのは誰だろう」

平次は妙な事を訊ねました。

「殺された正次郎さんでしたよ、——嘉助さんも、あの通り年を取とったし」

お徳は躊躇ちゆうちゆうする様子もなくこう言い切ります。

「福三郎は？」

「可愛がられてはいましたけれど、——お金の事は任せてくれなかつたようです」

お徳は少し淋いしそうでした。許婚いいなずけの福三郎が、どんなに良く勤めても、正次郎ほどの信用のなかつた口惜くやしさを、処女らしく隠

そうともしません。

「親分さん、私が御案内いたしましょう、——お徳さんはお茶の支度でもするがいい」

大番頭の嘉助は、店中の不安を代表してやって来ました。

「それはいい塩梅だ。いまお前さんに来て貰おうと思つていたところだ」

平次は愛想よく迎えます。

「親分さん、正次郎も可哀想ですが、私は旦那がお気の毒でなりません。屈めたことのない腰を屈めて、当てもなく出て行きました。が——」

嘉助はフツと口を噤みました。こんな事まで言つてはと思ひ當つたのでしよう。

「五千両盗られると、後には少しの用意もなかつたかい、番頭さん」

平次の胸には、妙な疑いが芽ぐみます。

「そんな事は御座いませぬ。五千両盗られても、まだ二千両はあの通り用意がございます。外に掻き集めると、千両はあるでしょう、差し当りの不足は二千両ほどで」

「それ位のことなら、細川様へ申上げて、日限を延ばして貰うわけには行かないものかな」

「とんでもない、大名方と来た日には、待て暫しがございませぬ。それだけにまた私どもの利潤も多いわけで、——今日納める五千両が纏まらなないと、出入り差止めになり、仲間への顔向けもならなくなりませぬ」

「なるほど、それは困るな」

平次は大番頭の指した千両箱を動かして見ました。重さからの感じが、間違いもない千両箱です。

「親分、主人の行く先を突き止めて来ましようか」

ガラツ八は鼻をうごめかします。いつぞや浜町の浪花屋の主人が、はらい払に困って、三千両を盗まれたと届出た例のあるのを思い出したのでしよう。

「馬鹿、——つまらないカンなんか働かせて、人様の物笑いになるよ。それよりこの町内を始め、浜町から両国へかけて、なにか変わったことがないか見て来るがいい。船で逃げたんでなきや、下手人かその相棒はまだこの辺にウロウロしているに違いねえ、あれだけの小判をバラ撒まいて、眺めていることだろう」

「なるほどね」

ガラツ八は飛出しました。

平次はその上帳面まで見せて貰いましたが、大黒屋も、五千両盗まれた上、また半日のうちに、五千両纏まとめるには困った様子ですが、商売の方は行詰った様子もなく、一つの土蔵の中には、穀物もつが一パイ、一つの土蔵の中には、金に飽かして買い込んだ、骨董とうじゅうき什器が一パイ入っております。

三

「親分、ちよいと」

ガラツ八は四半刻ばかりすると帰って来ました。

「なんだ、八」

「変な野郎がいますよ。余っぽど引くつ括くつて来ようかと思いまし

たが、親分に訊いてからと思つてそつと歸つて来ましたが」

「なんだ、それは？」

「今日は両国稲荷の縁日でしよう」

「それがどうした」

「大道見世物や、露店が二三百出ますぜ」

「――」

「夜の明けないうちから小屋掛けをしているに不思議はないが、一つ恐ろしくかけ離れて、横山町三丁目に、河童かっぱの塩漬しおづけを見せる小屋があるから驚くでしょう」

ガラツ八は勢い込んで続けます。

「ちつとも驚かないよ、地割りに漏れたもぐりの香具師かぎしだろう」

「大きな親爺おやしが、女房と二人で、今から木戸に坐っています、プカプカいぶ燻いぶしている煙草は、国府こくふの上等、――お大名の御用に上がるような葉だつたらどうします、親分」

「少しおかしいな」

「少しどころじゃありません、あれが昨夜の泥棒かっぱに違いないと思うがどうです。これは『馴れ』や『理屈』じゃない、あつしのカあつしンで」

「フーム」

「五千両持出したところを、番頭の正次郎に見付かり、追っかけて来たのを路地で絞め殺した、――が、町木戸がうるさいから、夜中じゃ遠くまで逃げようはない、ことにこの辺は浅草御門や、両国の橋番所、伝馬町の大牢ろうまで近いから、千両箱を五つ持つて、どこへも行けるわけはねえ、幸い用意した河童かっぱの塩漬しおづけ、あの中へ隠して、小判の塩漬などは良い知恵じゃありませんか」

いやもうガラツ八の得意さ——

「五千両盗んだ大泥棒が、人まで殺して逃げ場に困っているくせに、国府などを喫すっているだろうか」

「——」

「八、あまり騒ぐんじゃないよ、そつと行って、裏から呼出して、十手のガン首でも見せて、河童の塩瓶がめを引っくり返してみな、中から、今朝拾った小判が二枚か三枚出て来るから」

「へエ——」

「その上うんと脅おどかして、昨夜から今朝へかけて、横山町をうろうろしていた人間がなかったかどうか、訊いてみるがいい」

「へエ——」

ガラツ八は一句もありませんでした。平次のカンの素晴らしさに圧倒されて、そのまま飛出しましたが、間もなく、旋風つむじのように飛んで帰りました。

「どうした、八」

「塩漬の中には、小判なんかありませんよ。河童の見世物は、死んだ犬の仔を乾ほし固かためたんで」

「国府は？」

「それを訊くと元は町人で、煙草だけは贅ぜいを尽したから、落ちぶれても馬糞煙草まぐそたばこは喫のめねえ、——と言やがるんで、その口の下から女房も、うちの人は酒を飲まないから、せめて煙草の贅ぜいをさせているんですよと——顎あごを突き出しましたぜ。もつともそう言う女房は少し飲くらっていたようで、亭主の国府に張合あって、朝から濁酒どぶろくでも呷あおったんでしょ」

「八、そいつは本当か」

「本当にも嘘にも、作の入れようがねえ」

「財布の中にも塩瓶にも金がなきや、そいつは思いの外ほか大物かも知れない、一両拾ったなら判るが、香具師やがただの道楽で国府は変り過ぎる、来い八」

平次は飛出しました。その頃の国府を燻くゆらすのは、今の金口や葉巻にも匹敵ひつてきする贅ゝゝで、もぐりの香具師やしの好みにしては、少し変でないことはありません。

四

「御用ッ」

八五郎はいきなり河童の見世物へ飛込みました。何かよくない尻があったものと見えて、昼にも間があるのに幕張りの粗末な小屋を畳みかけていたのです。

「何をしやがる。安岡っ引きに御用呼ばわりなどをされる覚えはねえ、側へ寄ると河童かっぱをけしかけるぞ」

「神妙にせい」

「糞くそでも喰らえッ」

二匹の犬のように、猛然と噛み合う二人、後ろからは女房がガラッ八の鬚まげ節ぶしへ、必死とブラ下がってしまいました。

「あッ、痛えッ、放せッ」

「何をッ」

滅茶滅茶な騒ぎです。一と足遅れて駈け付けた平次は、漸くこの噛み合いを分けて、男女二人をキリキリと縛り上げました。

「歩けッ」

場所は両国、盛りこぼれるような弥次馬の中を、縄付を引いて行く照臭さ、あまり人を縛ったことのない平次は、ガラッ八の英雄的な得意さに任せて、一と足先に番所へ辿り着きます。

「お、銭形の、今日はお手並拜見に出て来たよ」

「お、三輪の兄哥」

銭形平次の顔は少し曇りました。またこの競争相手——三輪の万七——が出て来ては、事件が反ってこんがらかりそうでならなかったのです。

「大層遠慮するじゃないか、銭形の。何だって大黒屋の主人を縛らないんだ。いつぞや浜町の浪花屋がやった術だ、今日に迫った五千両の工面に困って、番頭を人身御供に上げて一時逃れをするつもりだろう」

「それは違う、三輪の。あの術はもうこの界限で二度とくり返す馬鹿はあるまい」

「そう思うところが付け目さ」

「それに大黒屋の身上は、三千両五千両で困るほどに傾いちゃいない。差し当り現金を集めるのに困ったところで、昼頃までには、市兵衛はきつと五千両拵えるから」

「大層信用したんだね」

「見ているがいい、今相棒を一人縛って来たから、あの男が口を割りさえすれば、五千両盗んだ奴も、番頭の正次郎殺しもすぐ判る」

平次は河童の塩漬の中にも、香具師の懐中にも小判の片らも見えないとすれば、早くも何処かへ隠したか、でなければ、横合いから五千両を攫われて、自棄のやん八で国府と濁酒に贅を尽くし

ていたのだと睨んだのです。

「名前は何と言う、どこの者だ」

ガラッ八の引いて来た香具師夫婦を、平次は静かに迎えて、こ
う訊ねました。

「名前は銅六、——銅屋六兵衛と言うんだ、女房はお浜、二人共江
戸の生れだ」

銅六は昂然こうぜんとしておりますが、言う事は思いのほか素直です。

「銅六——そうか、いい悪党だ。何だって五千両の餌えきなんぞに引っ
掛ったんだ」

「へッ、へッ、銭形の親分さん、——へッへッ存じていますよ、一
度は鼻を明かせようと思った相手だ。忘れてなるものか、——」

「そんな事はどうでもいい、俺は大方筋書すしがきを読んだつもりだが、
——お前の口から聴きたい、店で手引きをしたのは誰だ」

「へッ、へッ」

「福三郎か、嘉助か——」

「へッ、へッ、お察しの通りで、銭形の親分はさすがに眼が高け
え」

書き損ねの達磨だるまのような髯面ゆがを歪めて、銅六はニヤリニヤリと
笑うのです。

「馬鹿野郎」

銭形平次は立ち上がると、いきなり平手で銅六の頬ほおを一つ喰
わせたのです。『平次が縄付を撲うつ——』こんな事があり得るで
しょうか、ガラッ八は眼の前で行おこなわれた奇蹟に仰天するばかりで
す。

「あッ」

銅六もあまりの不意に、さすがに度胆を抜かれた様子です。

「たった今この平次の鼻を明かしてやりたいと言ったのは誰だ、そんな間抜けな心掛けだから、五千両チヨロリと横取りされて、犬の子の死骸しがいの番人なんかしているじゃないか、その上正次郎殺しの罪でも背負い込んで、三尺高けえ木の上へ顎あごを載のっけりや世話アねえ」

「――」

「八、追っ付け旦那方が見えるだろう。ここに悪党がかったのが一人いるから、構うことはねえ、番頭殺しの下手人にして引渡しあかてしまえ、――知れたこと、五千両は大川へ沈めたのさ。伝馬町へ送られりゃ、容易のことでは証あかりが立たねえ」

平次の舌はその手よりも辛辣しんちつです。

「わッ、冗談じゃねえ、俺が下手人なんかでたまるものか。五千両持出す相談には乗ったが、人なんか殺した覚えはねえ」

銅六もさすがに仰天しました。

「黙らねえか、悪党らしくもない、相棒の正次郎は殺されたんだ、お前の身の証りを立てる者は、この平次より外には一人もいねえ」

「恐れ入った、銭形の親分。みんな言う、勘弁しておくんさい」

他愛たわいもなく崩折れる銅六。

「親分さん、この通り意気地のない亭主でござります。人相は悪党なみですが、とても人なんか殺せるような男じゃありません。五千両持出す話へ乗ったのも、この人にしちや荷が勝過ぎたんですよ、河童かっぱの番人をする位が分相応で――」

女房のお浜は弁べんじ立てます、此方が二三枚悪党が上でしよう。

銅六夫婦の言うのは、至って簡単でした。大黒屋の番頭正次郎とは、元よく暮していた頃からの知合いで、二三日前道で逢って合力ごうりきを持ちかけると、それじゃ大黒屋の土蔵から、五千両持出すから、それを大川まで運び、船で永代の知合いの家へ隠してくれ、日は両国稲荷の御縁日の前の晩、時刻は丑刻うしのこく前後、場所は横山町三丁目と話が決って、銅六はいかさまの河童の見世物まで用意し、夜っぴてそこにいても、人に疑われないだけの工夫をしたのです。「ところが、番頭さんはとうとう来ません、多分外に相棒を拵しやくえたのだらうと、腹を立てて夜の明けるのを待っていると、大黒屋の裏口で、本人が殺されているという騒ぎじゃありませんか、癩しやくにさわるが、相手が死んじゃどうにもならない。中ッ腹で女房と喧嘩した上、女房が濁酒どぶろくを呷ったから、あっしは国府こくぶを買って思う存分喫すったんで——」

銅六の話は馬鹿馬鹿しいがよく筋は通ります。

「それじゃ訊くが、正次郎を殺したのは誰だ？」

と平次。

「五千両横取りした奴でしょう」

「それは判っているが、正次郎が一番怖こわがっていたのは誰だ」

「主人の市兵衛ですよ」

「それから」

「番頭の嘉助、——こいつはヨボヨボのくせに、算盤そろばんがはつきりしているから、誤魔化ごまかしがつかねえとね」

「福三郎は？」

「主人の遠縁で、大きな面つらをしたいやな野郎だが、人間はあめえという話で」

「あとはどんな事を言った」

「あの家の中で、人間らしいのはお徳の阿魔あまだ。あんな女は滅多にねえ——つて言つてましたよ」

「よし、判った」

が平次はハタと行詰りました。金を持出したのは正次郎と判つても、その正次郎が殺されてしまつては、この先どこへ、疑いを持つて行きようもありません。

「銭形の兄哥、——やはり主人が臭くはないのかえ」

三輪の万七はいい心持そうでした。が、幾度も幾度も懲こりているので、今度はさすがに縛ろうとは言いません。

大黒屋へ帰ると、中は火の消えたような淋しさ、雇人達は彼方あつち、此方こつちに幾かたまりにもなつたまま、仏間には朋輩ほうばいの死骸のあることも忘れて、押え切れない不安を語り合つております。

「銭形の親分さん、悪者が捕つたそうじゃございせんか」

お徳は飛んで出ました。

「捕まつたよ、お徳さん」

「五千両は？」

「それがどこへ行つたか解らない、——もっとも蔵から持出したのは、正次郎と判つたが」

「えッ、あの、正次郎どんが——本当ですか、親分さん」

お徳の驚きは一通りではありません。

「せっかく、死骸の番までして、誰も構わないのに、線香せんこうを絶やさないうにしている、お前には気の毒だが、正次郎は良くない

男だ。子飼いの奉公人が、主人の身代かかに關わるような金を持出して、罰ばちが当らずには済む筈はない」

「でも親分さん、死んだ者へ、線香一本上げる者もないような人達ばかりいる家なんです。正次郎どんばかり悪いとは言えませんよ」

「――」
お徳は妙に考えさせることを言います。

「この家はそんな家なんです、みんな銘々めいめいのことしか考えてはいません」

「――」
平次の驚きの前に、お徳は淋しいが、妙に情熱的な笑いを見せて、元の仏間に入って行きました。間もなく鉦かねの音がします。

申刻みなつ近くなって、主人の市兵衛は二千両の現金を持たせて帰ってきました。それに蔵の中の二千両、あとは店やら奥から持出して五千両に纏め、番頭の嘉助に丁稚でっちを二人、鳶頭かしらまでつけて、細川様御中屋敷に送ってやりました。

「まず、これでよし」

ホツとした市兵衛の顔を見ると、平次は今まで、何にもしていません。なかつた事を責められるような心持です。

六

五つの千両箱は、蔵から持出したに間違いはありません。廊下の軒下、ちょうど雨の後の軟やわらかい土の上に、乱雑に置いた跡まではつきり読めるのですが、家の中は言うまでもなく、隣りの穀蔵こくぐら

の米俵まで調べましたが、どこにも見付からなかったのです。

母屋は、幾度も幾度も、床下も、天井裏も、下水の中も、ゴミ箱も見ました。が、五千両は愚か、鏝錢一枚その辺には見付かりません。

「引揚げよう、いつまでいても無駄だ」

暗くなると平次はもう見切りを付けました。

「下手人は逃出しますよ、親分」

八五郎は心配でなりません。

「五千両は重いよ、背負って逃げるにしても、今日や明日じゃない」

「へエ——」

「せっかく取込んだ金を捨てるものか、帰ろう」

平次は未練気もなく立去りかけます。

「錢形の、俺が夜っぴて調べ上げて、下手人を縛っても構わねえだろうな」

三輪の万七は眼を光らせました。

「遠慮には及ばねえよ、三輪の兄哥」

平次は何のこだわりもありません。

「錢形の親分さん」

「何だ、お徳さんか」

小走りに追って来たお徳は、そっと平次の耳に唇を寄せました。「何んか変ったことがあったら、親分さんのところへ使いを出しますよ、——使いがなきや、私が一と走り——」

お徳は平次のファンの一人だったのでしよう。一つは夜っぴて踏み止って、みんなに厭な思いをさせる、三輪の万七の執拗さに

反感を持ったのかも知れません。

「有難うお徳さん、頼むせ」

香わしい息を頬に感じながら、平次はさり気なく言うのでした。
柳原土手の闇を急ぐともなく二人。

「親分、下手人は誰でしょう」

八五郎はたまりかねて声を掛けました。

「判らねえよ」

「五千両はどこへ持出したでしょう」

「それが判りゃ下手人は一刻経たないうちに挙げられる」

平次も本当に手掛りを掴めなかった様子です。

「福三郎じゃありませんか——大黒屋の遠縁の者だが、番頭にもしてくれず、当分は暖簾のれんをわけて貰うあて当もなく、思い合っているお徳と祝言をする見込みも立たず、主人の市兵衛を少しは怨うらんでいる様子ですが——」

これがガラッ八のカンでしょう。

「それは俺にも判るが、福三郎は腹から善人で、おまけに気が弱い。カッとなったら人を殺せないこともあるまいが、企たくらんで人を害あやめる柄じゃないし、それに五千両を隠すなんて器用なことの出来る男じゃねえ」

「——」

場末の芝居の二枚目のような福三郎は、なるほど人を殺せそうもありません。

その晩は何事もなく明けて、翌る日の朝、辰刻いっつ少し廻った頃——

「親分さん、大変なことが起りました」

大黒屋のお徳が、お静に案内されて入って来ました。

「何だ、お徳さん、五千両見つかったのか」

「いえ、柳橋下から、小判が八百何十枚か入った千両箱が揚がって大騒ぎですよ」

「あとの四千両は」

「それは判りません」

「それじゃつまらない、いずれ行って見るが——三輪の兄^{あにき}哥は」
平次は驚く色もありません。

「一生懸命です」

お徳は少し面白そうです。

四方山^{よもやま}の話をして、間もなくお徳は帰りました。それに続いて、平次とガラッ八が出かけようとすると、

「ちよいと、お前さん」

お静は背後から切火を打ちながら、考え深そうに言うのです。

「何だ、お静」

「こんな事を言っているのでしょうか、私にも少しばかり思い当ることがあるんですが」

「女房の意見で、御用聞が人を縛るわけにも行くまいが、何かの足しになることなら、言った方がいい」

平次は草履^{ぞうり}の爪先を直しながら、大して気にも止めない様子でこう言います。

「男の意気地は男同士でなきや解らないと言うように、女の心持は、女でなければ解らないところがあるでしょう」

「それはあるだろう。第一子供を生む心持なんてのは、男にや金^{こん}輪際^{りんさい}解りっこはない」

平次は少し茶化しております。お静に心安く言わせるためでしょう。

「そんな話じゃありません。先刻来たお徳さん、あの方を男の人が見たら、どう思うでしょう」

「元気で、明けっ放しで、親切で、なかなか良い娘じゃないか、それがどうしたんだ」

平次は改めてお静の顔を見ました。

「女から見ると、あんな人は本当に底が知れないと思います」

「それだけか」

「え」

お静は極り悪そうに俯向きうつむました。言わでものことを言ったと思つたのでしよう。

「そいつはお前のカンだ、大きに役に立つだろうよ。八、行こうか」

七

大黒屋へ行くと、また一つの騒ぎが始まつておりました。お徳が出かけて間もなく、手代の福三郎は七顛てん八倒とうの苦しみを始め、

「俺が悪かった、俺が悪かった」

と言いつつ死んでしまったのです。

町内の本道を呼んで見せると、岩見銀山いわみぎんざんの鼠捕りねずみとりで死んだと判りましたが、食い物は店中同じですから、何か理由わけがあつて毒を飲んで自害したと見るの他はありません。

その騒ぎの中に、何心なく帰つたお徳の驚きは、本当に見る眼

も哀れでした。

「あ、福三郎さん、何だって死んでしまったの、私にそう言ってくれれば、一緒に死んだのに」

猛毒に瘧^{けいれん}して、醜^{みにく}く歪^{ゆが}んだ福三郎の死骸に縋^{すが}り付いたまま、お徳は日頃の気丈さも振り捨てて、真に身も浮くばかり泣き濡れましたが、やがて、刃物を持出して、やにわに自分の咽笛へ突っ立てようとするのです。

多勢寄って刃物をもぎ取ると、死にたい死にたいと暴れ狂うお徳を押し付け、とうとう紐^{ひも}や帯でグルグル巻きにしてしまいました。そうでもしなければ、飛出して大川へ飛込んだかもわかりません。

平次とガラッ八はその騒ぎの中へ着いたのでした。

一埒^{うち}を聴いて、川から引揚げた千両箱を見せて貰って、その角の壊^{こわ}れを丁寧^{ていねい}に調べると、今度はまだ大黒屋にいる本道（内科医）に逢^あい、福三郎は心^{しん}の病^{やまい}（心臓病）があつて、持薬を飲んでいた事、——二三日前二日分の粉薬をやったから、まだ一二服、残っているだろう——と言う事等を聞きました。

福三郎の荷物や手廻りの品を調べましたが、薬などは一と包もありません。

「お徳さん、気の毒なことになったな、——福三郎は正次郎を殺して、自分の心にとがめて死んだんだらう。諦めるがよい、お前が泣いてやっても、その心掛けじゃあまり功徳^{くどく}になるまい」

平次はそう言いながら、お徳を抱き起しましたが、

「あッ」

身を揉む懐中へ、手を入れて、何やら紙に包んだものを引出し

ました。

「やはり持っていたのか、——心の病の薬とすり替えた岩見銀山が二た包、一つはお前の留守中に、福三郎が飲んだはずだ」

「違う違う、——それは私の癩しやくの薬」

お徳は必死とあらがいます。

「いや、今医者に見て貰うから、癩の薬か岩見銀山か、すぐ判るよ、——可哀想に福三郎は、恋仲のお前に殺されるとも知らず、お前を庇かばいながら死んで行つた」

「違う、——そんな、そんな馬鹿なッ」

お徳は必死と身を揉もみますが、先刻の芝居が過ぎて、あまりに嚴重に縛られたので、どうすることも出来なかつたのです。

少し蒼ざめた美しい顔にはタラタラと油汗を流し、唇を噛んだ血が豊かな顎あごに紅い糸を引いて、その凄まじさはありません。

「みな衆、ここへ来て聴いてくれ、隣りの仏間には仇同士の仏様が二つもいる。俺の言う事が違つたら、その時は違つたと言つて貰おう、証人は二人の仏様だ」

平次は美しい虫のように藻掻もがくお徳を見下ろしながら続けました。

「千両箱を五つ持出したのは正次郎だ。福三郎はそれを見付けて、路地で争ううち、お徳も起きて来て、福三郎に手伝い、とうとう、絞め殺してしまった、——福三郎はびっくりして人を呼ぼうとしたが、お徳は女ながら福三郎より三倍も五倍も太いから、正次郎の頸くびから自分の真田紐さなだひもを解いて、荒縄で頭を締めなおし、千両箱一つ叩き破つて、中の小判をバラ撒まき、残りは柳橋の下へ沈めた。これは外から悪者が入つたと見せかけ、あとの四千両を横領する

つもりの細工だ」

平次の明快な推理に、誰も口を挟む者はありません。

「そう言っちゃ悪いが、主人は正次郎にも福三郎にもお徳にも辛く当った。とりわけ姪のお徳には、言うに言われぬ怨もあつたろうが、人一人殺して置いて、その死骸の側にケロリとして付いているお徳の大膽さに、気の弱い福三郎は怖ろしくなった。たった一と晩だが、お徳には、自分から離れて行く福三郎の心持がよく解るし、その上、気の弱い福三郎は犯した罪に怯えて、いつ白状するかもわからない。お徳には恋より四千両の金が大事だった。かねて何となく用意した岩見銀山を三包、福三郎の持薬と摺替え、あつしの家へ来て、その間に福三郎に飲ませるように仕向けた――」

「帰って来ると、誂通り福三郎は死んでいた。さつそく残った二た包の毒薬を隠そうと思つたが、その隙がない。帯の間に忍ばせて、ともかく、大芝居に取りかかった――」

「違う、みんな嘘だ」

お徳は必死の声をあげました。

「まだそんな事を言うつもりか、お徳」

「四千両はどこにある。それを見付けなきゃ、お前の言う事はみんな拵え事じゃないか。私の帯の間から出た薬の外には一つも証拠はない」

お徳の言うのはもつともでした。

「四千両」

「千両箱が四つ」

主人市兵衛始め、居並ぶ人々の口から同じ絶望的な言葉が吐き出されます。

「あんな重いものを、女や手代の手で、どこへ持って行けるものか」

お徳の唇にはもう嘲笑が蘇生ります。

「あんな重いもの？」

平次は鸚鵡返しに言いました。千両箱と言うと、一両小判で千枚、一枚四匁としても四貫目、風袋を加えると一つ五貫目は下りません。華奢な福三郎が、たった一つ柳橋まで持運ぶのさえ大変な骨折りだったでしょう。

「解った」

平次は立上がりました。傍目も触らずに元の蔵の中へ――。

「親分、蔵から出た事は確かですぜ」

とガラッ八。

「また蔵へ戻したのだよ。それに気が付かないとは、俺も大間抜けさ」

平次は千両箱を七つも積んであったところへ来ると、その床の上に敷いた檜の一枚板を取りのけ、窓から射す陽の光をたよりに、床板を動かして見ました。

嚴重そうに見えた釘がなんの苦もなく抜けて、板が二三枚剥されると、その下は重い物を置くために井桁に組み上げた特別の土台で、その土台の中ほど、外からはどうしても見えようのない僅かばかりの隙間に、四つの千両箱を縦に並べて落し込み、その上を埃と土とで丁寧おおに蔽ほこりってあったのです。

「あつた」

主人市兵衛の狂喜する顔、平次とガラツ八はそれを見捨てて元の部屋に帰ると、二人の仏の前に、縛しばられたままのお徳は舌を噛み切り、のた打ち廻って苦しんでいたのです。

×

×

「八、俺はもう厭だ、御用聞をしていると、こんな事も見聞しな
きやならない」

惘然ちやうぜんとして牛の歩みを運ぶ平次の人間らしさを、八五郎は黙って見やるのでした。柳原の道には夏の陽が一パイに射しておりま
した。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十一年九月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第三卷 河出書房 昭和三十一年六月十五日初版

編集・発行 錢形倶楽部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>